花火を見るに

ガムベース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花火を見るに

【Nコード】

N9113M

【作者名】

ガムベース

【あらすじ】

僕は妹の夏子と花火を見る約束をしていた。花火大会の始まる三十分前に僕らは家を出て、夜道を歩く。

部屋の外で夏子が呼ぶ。僕は、お気に入りのスムーズジャズをかけて、ロッキングチェアに腰かけて旅情小説をめくっている。さして内容は頭に入ってこない。優雅な時間が好きだった。扇風機は止めている。夕立が長引いたおかげで、窓から入ってくる風だけで今夜は十分に涼しかった。何度目かの僕の名前が呼ばれ、声が大きくなっていることに気付いた。仕方なく立つ。本を置きコンポを止めて、タオルをかけた夏子の前に立った。額が濡れて光っていた。

「今日は涼しくてよかったね」

夏子は目を向けたままだったが、返事をしなかった。僕は、ごめんねと謝った。

「まだ七時半だよ、花火は八時からだから、三十分も余裕がある」
「打ち上げ会場までは遠いよ、もう遅すぎるくらいじゃない」と、怒ったように言った。

「車で行けばいいんだろう」

「車で行けるわけじゃないでしょ」夏子は怒り出すのを我慢しているみたいだった。「車でどこに行くの。歩いて行くに決まってるでしょ、何言ってるの？ ねえ今日は涼しいんじゃないの？」

夏子は腕時計をしていた。音楽を止めたので、針の音がかすかにする。僕の支度さえ整えばすぐに出かけられるようだった。僕は部屋に戻り、机の上から財布を取ってポケットに突っこんだ。財布は軽かった。お金はほとんど入っていないようだった。屋台が出ていても、たこ焼きを買うくらいがやっとだろう。夏子にせがまれたらどうしようかと心配になった。引き出しを開けて腕時計を探していると、夏子の腕に時計があったのを思い出して、引き出しを閉めた。夏子がシャツの襟首をつまんで風を入れていた。胸元の大きく開いたオレンジのTシャツは、単にサイズが大きいだけで、本人は涼しくて夏にはちょうどいいと言っていた。そのシャツが汗で濡れて

しわをつくりながら、夏子の体に張り付いている。電灯の下だと下着がうつすら透けて見える。外はもう暗かったから何も言わなかった。

台所に立ち寄り、冷たい水を一杯飲んだ。夏子は冷蔵庫を開けて探し物をしている。居間をのぞくと両親がテレビを見ていて、隅では扇風機が回っていたが、僕の部屋よりもずっと暑かった。出かけるの、と訊かれて、花火を見に行くんだと答えた。いつてらっしゃいと母が言う。居眠りをして聞こえていないと思った父が、ソファから手をひらひらさせた。夏子が背中をつついた。ドアを閉める。冷たいものが背中に当たる。夏子がアイスクャンデーを二つ持っていた。

外は涼しかったが、ほとんど風はなかった。二人で歩きながら夏子の持っていたアイスを食べた。元々僕らの間には大した会話もないから、一緒にいると無言になる。口がふさがってちよつどよかった。一緒にいることだってそう多くはない。虫の声に混じって、遠くで犬の遠吠えがした。耳を澄ませば夏子の腕時計の音も聞こえそうだった。虫の声は大きくて、時計の針の音が聞こえるはずはないけれど、耳を近づければ聞こえるかもしれないと僕は思った。夏子がなるべくこちらを見ないようにして、歩いている。アイスの棒をくわえて、遠くに見える、街の明かりを見ていた。僕も同じ方角を眺めながら、アイスのなくなった棒を道の脇に吐き捨てた。草を踏むと夕方に降った雨の飛沫が足にかかる。小さな橋を渡るとき、夏子がふと立ち止まって、アイスの棒を川に投げ込んだ。落ちる途中で見えなくなって、何の音も聞こえなかった。

夏子があと五分しかないと言って、突然走り出した。それほど時間が経ったようには思えなかった。ぼんやりと後姿を見ていると、夏子の姿がだんだん遠くなって、しだいに闇に消えてしまいうようになって、僕は慌てて後を追って走った。なぜか夏子は振り返るうとしないで駆けていく。スピードを落とそうともしなかった。僕のほうが足は速いはずだったが、途中で諦めて立ち止まった。暑くてし

んどかった。気づいたら息が上がっていて、これ以上走ったら倒れてしまいそうだった。歩いてゆっくり追いかけようと思ったが、夏子がどこから花火を見ようとしているのか、そういえば僕は知らなかった。

橋の上だろうか、丘の上だろうか。街のほうだろうか。近いところだろうか、それとも遠いところだろうか。それにしても、せつかく一緒にきたのに、一人で走って行ってしまっなんて、あんまりだと思った。夏子がどこへ行きかけたのか知らないが、やっぱり車でくればよかった。

やがて鳴りだした花火が、遠くで小さく咲いた。指先にも満たない小さな花火だったが、ここからでも十分に真ん丸に見えた。ずいぶん遠いようだった。たかだか三十分、人の足で歩いたからといって、進める距離は知れている。夏子はいまどこから花火を見ているのだろう。夏子は、花火が始まったことに気付いているだろうか。

目の前の交差点に、かかしのように突っ立ってぼんやりと花火を眺めている夏子の姿があった。ひときわ大きな花火が上がって、すごおい、と声をあげる。夏子はこちらを向いて手を振った。ようやく追いついて、隣に立ち、ここからだとすぐよく見えるね、と僕は言った。でも、一人で歩いていた道から見たものと、それほど違わないと思っていた。夏子も、うんと答えて笑ったが、きっと僕と同じことを考えていたに違いない。

（おわり）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9113m/>

花火を見に

2010年10月8日13時46分発行